

# 世界への扉は開いていた！

～ドキュメンタリーの国際共同制作を目指して～

## 1 高まる国際共同制作への関心

いま日本のドキュメンタリー制作者の間で国際共同制作への関心が高まっている。きっかけは2011年3月にソウルで開かれたAsian Side of the Docというドキュメンタリー関連の国際イベントだ。日本語同時通訳が用意されたため、東京からだけでなく大阪や北海道からTV局、制作プロダクション、広告会社、公共団体など映像制作にたずさわる関係者が多数参加した。

このイベントの中で日本からの参加者の多くが最も興味を持ったのが、ドキュメンタリーの国際共同制作に向けた公開提案会議（ピッチング・セッション）だ。提案会議ではアジアの若いドキュメンタリー監督が、ヨーロッパのTV局プロデューサーに向かって堂々と自分の企画を説明し、国際共同制作に向けて動き始めるという具体例を目の当たりにした。日本のTV局とだけ仕事をすることが多かった番組制作プロダクションの関係者が、「世界への扉は開いていたのだ！」と肌で実感する機会となった。

## 2 世界で進むドキュメンタリーの国際共同制作

海外でもドキュメンタリーは、映画やドラマなどに比べると決して主流のコンテンツではない。さらに、これまでドキュメンタリー制作を支えてきた公共テレビ放送局も、経済状況の悪化やニュースメディアの台頭、そして若者のテレビ離れなどを受けて、従来のような潤沢な制作予算を提供できなくなってきた。もちろん日本でも、状況は同じだ。

こうした厳しい状況の中で制作予算を確保するため盛んに行われているのが“国際共同制作”という仕組みだ。企画開発、制作資金の確保、撮影、ポスプロなど、ドキュメンタリー制作の様々な場面で、制作プロダクションやTV局が国際的に協力していくのが国際共同制作※1だ。

ここで取り上げる国際共同制作は、Independent Filmmaker※2と呼ばれる民間の制作プロダクションやドキュメンタリー監督が発意した企画に対し、様々な国のTV局や財団が制作予算を提供するスタイルだ。（制作予算分担型の国際共同制作）

この形の国際共同制作では、実際に撮影、ポスプロを行うのはIndependent Filmmakerで、様々な国のTV局や映画支援財団は制作予算を“共同”で分担し、制作の節目、節目でCreative Input（編集方針、番組構成などを伝えること）を行う。

※1 国際共同制作には、テレビ局どうしが企画開発、撮影、編集などを共同で行う形（制作分担型の国際共同制作）や、テレビ局が同じテーマの元でドキュメンタリーを制作し、番組を交換しあう形（番組交換型の国際共同制作）などがある。ここで説明するのは、制作予算分担型の国際共同制作だ。

※2 直訳すると“独立したフィルム制作”。個人、会社所属を問わずドキュメンタリーを制作しているディレクターやプロデューサーをこう呼ぶ。“ドキュメンタリーの作り手”と言ったところか。

## 3 海外イベント事情

“制作予算分担型の国際共同制作”が成立する道筋が、ここ10～15年で大きく整備されてきている。中心的な役割を果たしているのが“ピッチング・セッション”だ。ピッチ・イベントともよばれる。

Pitchを直訳すると「投げる」。ドキュメンタリーの世界では、「提案を投げる」、「提

案をする」という意味で使われる。つまりピッチング・セッションとは「提案会議」だ。

ピッチング・セッションは毎月のように世界中で開かれている。その性格も様々で、海外のドキュメンタリー制作者は自分の企画に合った提案会議を選び積極的に提案を行っている。会議には多くのコミッショニング・エディター※が参加し、自国の視聴者に適した企画に次々と参加を決めている。

※ コミッショニング・エディター 予算を持っているTV局のプロデューサー。提案された企画に対し予算の提供を決め、制作をコントロールする。ドキュメンタリー支援を行っている財団のプロデューサーや責任者もコミッショニング・エディターと呼ぶ。Decision Maker（決定権者）とも言う。

日本では2011年12月に東京TVフォーラム（ATP主催）の中心的なイベントとして初めて開かれ、海外から招待された20人のコミッショニング・エディターに対し、21の企画が提案された。

Independent Filmmakerを支援するイベントはピッチング・セッション※だけではない。ドキュメンタリー祭など、様々なイベントが開催されている。その中から主要なもので、日本の制作者が参加する価値のあるものを選んで紹介する。

※ 提案者の持ち時間はおよそ20分。10分以内で提案の説明を行い、残りの時間で質疑応答が行われる。公開で行われることが多く、企画の説明やコミッショニング・エディターのコメントを聞くことは、ドキュメンタリー制作者にとっては貴重な機会だ。

## 4 欧米の2大ドキュメンタリー祭

### ◆Hot Docs カナダ／北米最大のドキュメンタリー祭

#### ◎ <概要>

Hot Docsはカナダ・トロントで開かれる国際ドキュメンタリー祭。その名前はホットドッグ（Hotdog）のスペルをもじったもので、“ホットなドキュメンタリー”という意味もあるようだ。毎年5月初旬に10日程度の日程で行われ、150本以上が参加するコンペティションや、様々な Industry programs が開かれる。ちなみに Industry は直訳すると産業という意味。Industry programs もしくは Industry events は、ドキュメンタリー産業を支援するために行われるイベントだ。

参考ウェブ：<http://www.hotdocs.ca/>

#### ◎ <Hot Docs Forum ピッチング・セッション>

Hot Docsの中核イベントとして位置づけられるのが Forum だ。ピッチング・セッションのことを Hot Docs ではこう呼んでいる。2011年には27本の企画が採用され、TV局プロデューサー、制作支援を行っている財団のプロデューサー、配給業者などおよそ190人が参加した。このイベントの目的を主催者は下記のように説明している。

- ・ 素晴らしい国際的な企画に対する制作資金やノウハウ面での支援
- ・ 制作資金を提供することができる責任者との密なるネットワーキング提供
- ・ 新進気鋭の制作者への機会提供

制作者には資金を、TV局のプロデューサーには企画の情報を、傍聴者にはドキュメンタリー制作の知識を、そしてすべての人にネットワーキングの機会を提供するということであろう。

無断複製・転載・配布禁止

## ◎ <企画応募のガイドライン>

Hot Docs Forum に応募できる企画要件の概要は下記の通り。

- ・放送用尺つまり 50～60 分、75～90 分程度の長尺版、シリーズ番組、ネットとの連動など。短編以外であれば、形式は問わない。
- ・提案者はインデペンデント（独立系）。
- ・制作資金の 20 %以上 75 %以下が確保されていること。
- ・提案会議で上映するトレーラー（デモ映像）を事前に送付。

Hot Docs Forum のホームページには、様々な情報が懇切丁寧に書かれている。しかし受け付けるジャンルについては記載が無いが、社会の実像を映し出す企画、過去の歴史を再評価する企画などが採用される傾向がある。

## ◆IDFA オランダ

### ◎ <概要>

国際ドキュメンタリーフィルム・フェスティバル・アムステルダム（IDFA・イドファ）はオランダ国内および世界のドキュメンタリー文化を活性化するために 1988 年に始まった。「ヨーロッパ最大のドキュメンタリー関連イベント」とされることに、業界関係者に異論は無い。

参考ウェブ：<http://www.idfa.nl/industry.aspx>

### ◎ <The Forum ピッチング・セッション>

IDFA のピッチング・セッションは The Forum と呼ばれる。参加するコミッショニング・エディターの数、企画のクオリティ、集まる制作資金などいずれも世界最大規模ピッチング・セッションだ。2種類あるうちのメインの提案会議については、制作資金の 25 %が確保済みで無いと応募できないなど敷居は高い。アジアからの企画応募については数がそもそも少ないと想われる。

### ◎ <その他のイベント>

IDFA で行われるコンペション部門もドキュメンタリー関係者の注目度が高い。Feature Length と呼ばれる長尺ジャンル、TV 版（50 分前後）ジャンル、そして若手監督向けの“第 1 作目ジャンル”などに分けられる。授賞式の最期に呼ばれるのは、やはり長尺版部門のグランプリ。この部門の価値が最も高い。アムステルダムの多数の映画館で有料で公開され、人気作は売れ切れも続出する。

バイヤー向けに数多くのドキュメンタリーを試写できる会場も用意してある。最近は登録したバイヤーはオンラインでも試写が可能だ。制作者むけに様々なトレーニング・セッションも行われる。

## 5 英仏の 2 大イベント

### ◆Sunny Side of the Doc フランス

フランスの団体が主催するドキュメンタリーの国際共同制作関係者が集まるイベント。以前はマルセイユで開かれていたが、現在の開催場所はフランス西部のラ・ロシェル（La Rochelle）。大西洋をのぞむ、こぢんまりとした港町だ。

2012 年が 23 回目の開催、日程は 6 月 26 日から四日間。毎年、6 月後半に行われている。2011 年の実績報告によると参加総数は 1743 人、コミッショニング・エディターとバイヤーは 290 人が参加。

会場は港沿いにあるイベント会場で、ドキュメンタリー祭としては珍しくTV局や大手プロダクションの展示も行われる。2011年には455団体が参加した。

Hot Docs（カナダ）やIDFA（オランダ）と比べるとアットホームな雰囲気が感じられる中規模のイベントだ。

#### ◆Sheffield Doc/Fest シェフィールド・ドキュメンタリー祭 イギリス

イギリスのシェフィールドで5日間の日程で開かれるドキュメンタリー祭。これまでIDFAと競合する形で秋に開かれていた、2010年から6月に開催時期を変更した。IDFAとは日程が離れたが、こんどはフランス系のSunny Side of the Docと日程が近接した。

Sunny Side of the Docにはアジアも含め世界中から企画が集まるのに対し、Sheffield Doc/Festには、ヨーロッパを中心とした企画やドキュメンタリー関係者が集まる。特徴はピッチング・セッションが行われず、制作者とコミッショニング・エディターとのミーティングが集中的にオーガナイズされるところだ。

### 6 アジアのドキュメンタリー祭

#### ◆CNEX Chinese Documentary Forum (CCDF) CNEX ドキュメンタリー祭 台湾

C N E Xという台湾、中国、香港で活動している団体が企画、運営しているドキュメンタリー・イベントで2010年から始まった。

「CCDFはドキュメンタリー制作の“場”（プラットフォーム）だ。つまりドキュメンタリー制作者を、コミッショニング・エディター、バイヤー、財団と結びつけ、ドキュメンタリー制作を支援し、プロフェッショナルとしての交流を提供し、国際共同制作を推進する」と主催者と謳っている。

CCDFでは、制作者向けのワークショップ、トレーニング・セッション、ピッチング・セッションなどが行われる。主に中国・台湾・香港の制作者を支援する目的だが、日本から参加することも可能だ。ピッチング・セッションで受け付けるのは、中国ネタに限られる。

参考ウェブ：<http://ccdf.cnex.org.tw/>

#### ◆Asian Side of the Doc (ASD) 香港→ソウル→東京

フランス系の団体Sunny Side of the Docが2010年からアジアで開催しているドキュメンタリーのイベント。2010年は香港、2011年はソウル、2012年は東京で開かれた。これまですべて3月の開催だ。

ASDでもワークショップやトレーニングセッションが行われるが、中心はピッチング・セッションだ。特徴は欧米の企画とアジアの企画がほぼ、半々採用されるところ。コミッショニング・エディターもヨーロッパを中心に北米、アジアから参加する。

2012年に東京で開催されたASDは、総務省からのRe-building Japan予算を得て、世界各地から200名ものゲストを招待し盛大に行われた。

参考ウェブ：[www.sunnysideofthedoc.com/](http://www.sunnysideofthedoc.com/)

#### ◆EIDF EBS International Documentary Festival

韓国の教育系公共放送EBSが主催しているドキュメンタリー祭。2004年から毎年8月にソウルで開かれている。コンペティション、劇場での上映、小規模な提案会議

無断複製・転載・配布禁止

などが行われている。劇場だけでなく、合わせてテレビでもドキュメンタリーの放送を行うのが特徴。世界の秀作ドキュメンタリーを韓国の視聴者にも広く知らしめる点でたいへん意味のあるイベント。制作者向けのトレーニング・セッションも開かれるが、提案会議への応募は韓国国内の制作者に限られるなど、国内向けのイベントである色彩が濃い。

参考ウェブ：<http://www.eidf.org/2011/eng/index.php/>

#### ◆TTVF 東京

日本初の本格的なドキュメンタリーの国際イベント。2011年12月に第1回が開かれた。主催はATP（社団法人全日本テレビ番組製作社連盟）。NHK、民放連、総務省、経産省などが後援した。

参考ウェブ：<http://ttvf.jp/>

シンポジウム、ピッチング・セッション、ワークショッピングが行われた。ピッチング・セッションでは、世界中からおよそ20人のコミッショニング・エディターと配給業者が参加。国際共同制作に向けたドキュメンタリーの公開提案会議としては日本で最初に開かれた。

参加したコミッショニング・エディターは、BBC（イギリス）、ARTE（フランス）、SVT（スウェーデン）、PBS（アメリカ）、CCTV（中国）、KBS（韓国）、EBS（韓国）、ディスカバリー・アジア（シンガポール）など。ヨーロッパやオーストラリアから有力な番組配給業者も参加した。2012年も12月に開かれる予定となっている。

### 7 テレビ番組最大のマーケット

#### ◆MIPTV／MIPCOM カンヌ

毎年、春と秋に行われる世界最大のテレビ番組マーケット。ドラマ、アニメ、ドキュメンタリー、ライフスタイル、リアリティ・ショーなど、あらゆるコンテンツが一同に会する。ドキュメンタリーの国際共同制作に向けた提案会議やミーティングも行われるが、MIPTV／MIPCOMの主たる目的は“完成番組に関する情報交換・売買”だ。

会場はフランス・カンヌのPalais des Festivals。カンヌ映画祭が開かれる会場だと言えば聞こえは良いが、建物は意外と古い。しかし会場に所狭しとブースが並ぶ姿は壮観。

「これほどたくさんのTV局、配給業者、制作プロダクションが世界に存在するのだ」と圧倒される。バイヤー、セラーは30分単位で打合せをブッキングするが、会場が広いので、うまくスケジューリングしないと移動ばかりに時間がとられ無駄が多い。

ふらっと参加しても得る物が少ないイベント。参加するのでれば、事前にミーティングをしっかりとブッキングしておきたい。

参考ウェブ：<http://www.mipworld.com/>

### 8 海外助成金（ファンド・財団・基金・支援機構）事情

世界を見渡すとドキュメンタリーの制作を支援する基金や財団の数は少なくない。企画開発、撮影、ポスプロ、そして配給など様々な段階での助成を行っている。その一つ、アメリカのサンダンス映画祭ドキュメンタリー・ファンドのウェブサイトには「毎年、世界61カ国で500本の作品が資金的な支援を受けている」と記述されている。

無断複製・転載・配布禁止

しかし一般的にこうした助成金では、応募の数が多く競争がたいへんに激しい。また採択されても実際にお金が振り込まれるまで、しばらく時間がかかる。助成が決まる前から当てにしてはいけない。

残念ながら日本にはドキュメンタリーを支援するファンドはほとんど存在しないため、海外のファンドに応募するしか助成を受ける道は無い。当然、応募は英語。日本の制作者にとって敷居が高い。しかし日本からの応募が少ないと考慮すると、欧米の制作者に比べると競争率は低いのかもしれない。

## 9 アメリカの助成金

### ◆ITVS

ITVSはアメリカの公共放送に優良な番組を提供するため、世界のドキュメンタリーフィルム制作者に支援を行っている。

「ITVSはクリエイティブで、進取の気性に富み、通常のテレビ番組では目にするとのない視点を持った番組を作るため Independent Producer たちと手をとりあっていく」と目標を掲げている。また視聴率を稼ぐための番組ではなく、忘れ去られたような存在になっている視聴者にも届く作品を制作し、社会に様々な声を伝えていくのも ITVS のゴールだとしている。

アメリカのほとんどのファンドが見返りを求めるのに対し、ITVS はアメリカの公共放送（PBS）で放送することを前提としているため、支援を受けたドキュメンタリーのアメリカでの放送権は ITVS が持つこととなる。

ITVS編成担当副代表 クレア・アギラー (Claire Aguilar) さんからのメッセージ  
私たちは日本の Independent Filmmaker のみなさんからの応募を歓迎します。単発ドキュメンタリーの国際共同制作をいっしょに進めましょう。日本の作品に資金提供し、社会問題を扱うドキュメンタリーをアメリカ放送することは、とても重要なことです。私たちは2005年以降、100本以上のドキュメンタリーの国際共同制作を世界中の制作者と進めてきました。これからはアジアのみなさんと国際共同制作を行うことに大いに興味があります。次回の応募締め切りは12月です。下記のウェブサイトから、是非、応募してください！

参考ウェブ：<http://itvs.org/funding/international/expect>

### ◆The Gucci Tribeca Documentary Fund トライベッカ

2001年のロバート・デニーロによってニューヨークで設立された非営利団体である The Tribeca Film Institute (TFI) は、助成金と専門的な知識を提供することで Independent Filmmaker を支援している。ニューヨークで映像制作を学んでいる学生への教育事業にも熱心だ。

TFI の活動の一つが、Gucci とともにに行っている The Gucci Tribeca Documentary Fund。人間をテーマにした社会派の長尺ドキュメンタリーへの制作資金提供を行う。世界のどこからでも申請可能だ。「これまでに選ばれたのは熟慮を重ねた深い語り口で、ユニークで力強い映像表現をする作品だ」と、特徴づけている。海外からの応募に対しても積極的に支援を行う。

参考ウェブ：<http://www.tribecafilm.com/>

### ◆サンダンス

サンダンス映画祭は1981年にロバート・レッドフォードが中心となって始めた映画祭。運営母体となっている Sundance Institute は、ドキュメンタリー映画への支援も行っている。プロジェクトの一つが Sundance Institute Documentary Fund (サンダンス・ドキュメンタリー・ファンド) だ。資金提供の対象となるテーマは、「現代的な人権問題、表現の自由、社会正義、市民の自由、社会問題の批判など。世界の人たちの生活をより良くしようという志を感じるテーマ設定だ。

開発に対する援助は2万ドルまで。ラフカットまでは必要ないが、短いトレーラー提供が推奨されている。撮影、ポスプロ段階での支援の上限は5万ドル。20分から75分のラフカットが必要となる。ラフカットとは言ってもストーリーラインや表現手法など、作品の最終形をきちんと伝えるものが求められている。

参考ウェブ：<http://www.sundance.org/programs/documentary-fund/>

### ◆Cinereach シネリーチ

ニューヨークに拠点を置く非営利団体。フィクション、ノンフィクションの映像作品へのサポートを行っている。2006年から2011年までに拠出した助成金は500万ドルを超える。

助成金は作品ごとに5000ドルから50000ドルの間となっていて、開発、撮影、ポスプロのいずれの段階でも助成が可能。毎年5本から15本の作品を採択している。「映画的な視覚表現とストーリー展開が必要」としている事から伺えるように、ドキュメンタリーでも映画的なアプローチの作品が好まれるようだ。

参考ウェブ：<http://www.cinereach.org/>

## 10 アジアの助成金

### ◆Asian Network of Documentary (AND) Fund アジア映画ファンド

韓国のプサン国際映画祭 (Busan International Film Festival) が2007年に立ち上げたのが Asian Cinema Fund(ACF)だ。支援額は、約5000ドルと約10000ドルの2種類。応募の条件は撮影段階、もしくはポスプロ段階にある作品で、長尺版の劇場公開を目指していること。テレビ向けに作られる作品は対象外だ。劇場公開のあとにテレビで放送することは問題ない。

参考ウェブ：<http://acf.biff.kr/structure/eng/default.asp>

### ◆Hong Kong - Asia Film Financing Forum(HAF) 香港アジア映画支援ファンド

HAFは主にフィクション映画の支援を行ってきたが、2012年からはノン・フィクションの映画への支援も始めた。日本のドキュメンタリー制作者が応募可能なのは、HAF Award (non-Hong Kong Project)だ。支援金は15万香港ドル（約130万円）。制作段階は問わないが、アーティスティックであり、かつ商業的な価値も問うとしている。commercial quality を掲げているのは、いかにも香港の財團らしい。

参考ウェブ：<http://www.haf.org.hk/haf/submission.htm>

## 11 最後に

扉は開かれたと言ってもすぐに国際共同制作が実現するわけではない。制作者自身も、テレビ局もまだまだ知識もノウハウも足りない。しかしドキュメンタリーに関わる人たちが、立場を超えて手をとりあうことが大切だろう。

海外のドキュメンタリー祭には、制作者、TV局関係者、財団関係者、配給業者、国際プロデューサーなど様々な業種の人たちが集まるが、どのドキュメンタリー祭も雰囲気がとても暖かく、そして楽しい。それはよりもなおさず、みんなドキュメンタリーが大好きだからだ。立場が違っても、“良いドキュメンタリーに制作資金を何とか集め、制作者の熱い思いを実現させてあげよう”という目標に向かって、立場が違う人たちが協力しあっている。

もちろんきわめてプロフェッショナルな人たちの集団で、心意気だけではドキュメンタリーを作らせてはもらえない。しかし思いは同じ。とても気持ちのよい業界だ。

より多くの日本のドキュメンタリー関係者が世界に踏み出し、日本で制作されたドキュメンタリーが世界で放送、上映されることを願ってやまない。

---

平成24年3月 発行

発行元 公益財団法人 大阪市都市型産業振興センター  
ソフト産業プラザ イメディオ

無断複製・転載・配布 禁止

財団法人大阪市都市型産業振興センター ソフト産業プラザ イメディオ